

H YOG

教区新報



兵庫教区教務所
ホームページ



兵庫教区教務所
facebook

発行所

浄土真宗本願寺派 兵庫教区教務所
〒650-0011 神戸市中央区下山手通8丁目1番1号(本願寺神戸別院内)
電話 神戸(078)341-5949(代)
[編集] 兵庫教区広報部

2022.10 215号

オンライン研修の手法を学ぶ

組活動の活性化に向けて

新型コロナウイルスにより組活動が停滞する状況を打破しようと、教区実践運動委員会による新たな取り組みが始まっている。

その第一歩として、九月二日に「教区重点プロジェクト」が、それぞれ神戸別院で開催された。

目的は、コロナ禍でも教化・伝道活動が継続できるように、ICT(情報通信技術)を活用した研修会や法座のあり方を検討・構築することである。

組でオンライン研修を行う際に中心となる研修講師など計六十名が参加し、「オンライン研修を始めるまでの準備」「オンライン研修の運営方法」について、学びを深めた。



持参のPCでZoomのホストを体験

具体的には、組活動におけるZoomやYouTubeの活用方法、オンライン研修で必要となる機材やその設置のしかた、Zoomの基本操作やホスト体験など、各自が持参したパソコンやタブレットを用いて、体験学習が行われた。

八日の参加者からは「実際に体験することで、Zoomについて疑問が解消できた」「必要な機材について、実物を見ながら説明を受けることで、理解が深まった」などの感想が寄せられた。中には、「大変有意義な研究会でした。器材の豊富な別院だなど自教区ながら誇らしく思いました」という声も。

本研修をきっかけに、組連研や組同朋講座をはじめ、組における研修会や行事の再開が切望される。

なお、各組で同様の研修会を開催する場合、教務所職員が組へ出向することもできる。詳しくは教務所まで。

【教務所 ☎078-341-5949】



今年度上半期、「ちむどんどん」というドラマが放映されていた。舞台は沖繩。タイトルの「ちむ」とは沖繩の言葉で「肝(きま)」を表す◆そこから、沖繩では「肝苦(ちむくる)」しい」という表現があると聞いた。自分は安全なところにおいて、他者を「かわいそうに」と、眉をひそめて、後は無関心という感覚ではない。まさに、相手の痛みを我が痛みとして、そのことで自身の肝まで引き裂かれるという心、そういう意味らしい◆相手の苦しみの全てをわかりきるという事は容易ではない。けれど、時世の感染症拡大に伴い、今まで経験したことがない、生きていくことへの苦悩を感じる方々が、多数おられるに違いない。私もそのひとりである◆その私の苦しみを我が苦しみとして包み込んでくださる大悲をいただく中、遇法の慶びと共に、「悲しみの共有」を忘れてはならないと考えさせられる昨今である。

高砂組 善行寺 網干善一郎

新組長会長・新副組長会長決まる



組長会長
吉田信哉氏



組長会副会長
棘信勝氏

組長会ならびに組長研修会が、神戸別院で六月二十八日に開催された。

この度の組長会は、新型コロナウイルス感染拡大防止



ご講師の薬師神氏(生田警察)

のため、オンラインを併用しての開催となった。組長会では、藤榮行信前組長会長(淡路組宣徳寺前住職)の辞任をうけ、新たな組長会長の選出が行われた。

協議の結果、吉田信哉氏(前副組長会長・岡山南組法親寺住職)が、新組長会長に選出された。また、副会長に棘信勝氏(神戸東組正寿寺住職)が選出された。

また、組長会に先立つての研修会では、高齢者と接する機会が多い僧侶が詐欺被害を防ぐ一助となればとの願いから、近年、社会問題にもなっている特殊詐欺について研修が行われた。

研修では、生田警察署の生活安全課より講師をお招きし、被害者の八割強を六十歳以上が占めることなど、特殊詐欺の現状と対策について学びを深めた。

親鸞聖人御誕生850年・立教開宗800年によせて

2023(令和5)年にご法要をお迎えするにあたり、四夷法顕さんに連載いただいています。親鸞聖人御誕生の意義、立教開宗が示す意味を、一緒に味わわせていただきますよう。



立教開宗の年、「元仁元年」について

宗門の史料で初めて「立教開宗」という語が出るのは、明治九年に教部省という宗教行政をつかさどる当時の省庁に録呈された「宗規綱領」です。そこには、

宗祖親鸞年五十二、常陸国稲田ニ在テ、無量寿経ニ依テ浄土真宗ノ名ヲ立テ、「教行証文類」ヲ作ル。是ヲ立教開宗ノ本書トス。実ニ後堀河天皇元仁元年甲申ニシテ、師源空没後十三年ナリ。(『真宗史料集成』巻十一・三五二頁)

とあるように、親鸞聖人の主著『教行信証』は「元仁元年」(一一二四年)、聖人が五十二歳のときに撰述されたものとされ、真宗教団ではこの「元仁元年」を浄土真宗の立教開宗の年と定めています。

それは『教行信証』「化身土文類」に、釈尊が入滅されてから今日まで何年経っているかを算定し、今がまさしく末法の時代であることを表明するところに、「元仁元年」という

年号が出てくるためです。

しかし、果たして『教行信証』が「元仁元年」に撰述されたのかといえ、実際はそう簡単に決められません。それは聖人の他の著作には、ほとんど終わりに撰述年時が明記されていますが、『教行信証』にはそれがなく、「元仁元年」は撰述年時として記されているわけではないからです。

さらに聖人の筆跡研究の進展により、少なくとも『教行信証』の完成は、「元仁元年」よりも後であることが確実になってきました。おそらくその撰述は「元仁元年」を含む数年間に原形が整えられ、それをベースに清書したのち何度も推敲を重ね、さらに大幅な改訂を経て、門弟の尊蓮へ書写を許された七十五歳頃に一応は完成したとみるべきであろうとされます(推敲は八十歳以降も重ねています)。

そうすると、「元仁元年」という年号がいかなる意味をもつのかを考える必要が出てきます。これについても様々な

説がありますが、「元仁元年」は師・法然聖人の十三回忌の年で、当時の仏教界から二回忌の念仏禁制が出された年にあたります。つまり「元仁元年」とは、親鸞聖人がお念仏の教えの正当性を当時の仏教界に主張するために、『教行信証』を撰述せずにおれなかつた動機の一つを示す年号であったといえます。

前回(一一四号)、親鸞聖人には立教開宗の意図はなかったことを述べましたが、その意味からすれば「元仁元年」が立教開宗の年とされるのは、あくまで後世の設定によるものです。しかしその元は、親鸞聖人が自身をお念仏の道へと導いてくださった阿弥陀如来の仏恩、法然聖人の師恩に報いるために思い立たれた年号だったのです。

立教開宗八百年をお迎えするにあたり、私たちはそのことを忘れてはならないと思います。

龍谷大学 相愛大学 非常勤講師
阪神西組 信行寺住職

四夷法顕
しいほうけん

再び戦場にしないために —ドキュメンタリー「沖縄戦」上映会—



非戦・平和推進検討委員会主催により、「ドキュメンタリー沖縄戦 知られざる悲しみの記憶—再び戦場にしないために—」と題して、映画上映会が九月七日、神戸別院で開かれ四十名が参加した。

ロシアの軍事侵攻により再び戦争という問題がクローズアップされる中で、改めて過去を振り返り、念仏者としてのようであるべきかを問うことが目的である。

太平洋戦争で唯一、国内で地上戦が行われた地「沖縄」。本作は、その凄惨さと、そこに記憶された歴史、戦争体験者の声を継承していくことは、平和実現のために極めて重要である、という見地から、浄土真宗本願寺派が制作。現地調査を重ね、二年前に全国で公開された。

戦火を生き延びた門徒、集団自決の生存者、学童疎開中に撃沈された対馬丸の生存者など、十二人の証言と沖縄戦研究者八人の解説。米軍の記録

映像で構成され、沖縄戦開始から終結までを追いかけた内容は、大きな反響を呼んだ。

当日は、上映に先立ち、制作スタッフとして携わった、香川真二氏(宗派総合研究所上級研究員)のお話があった。

当初、沖縄戦体験者の言葉を文字で残そうと企画したが、本作の監督である太田隆文氏(奈良県斑鳩町・誓興寺寺族)より、「体験者が語る姿をみなければ、伝わらない」との指摘を受け、映画制作へ話が進んだこと。

多くの方の思いが詰まった二時間近い長編だが、実際は、その何倍もの話を聴かせていただいた。フィルムに収めるため断腸の思いで編集したことなど、多くの撮影秘話が語られた。

上映後のアンケートでは、「平和を訴えるメッセージがとても伝わった」「本映画を身近な方に見てもらいたい」とも見てもらいたい」との回答をいただいた。

教区では本作の貸出

を行っている(ブルーレイ形式)。平和学習などで、ぜひ活用いただきたい。申請は教務所まで。

非戦・平和のパネル展



非戦・平和のパネル展

映画上映会に合わせ、「非戦・平和のパネル展」が開催された。

パネル展は、高橋雅之氏(養父組念願寺住職)より寄贈の約五十枚【戦争と平和の実物資料(桐書房・組写真ヒロシマ・ナガサキ(日本教職員組合作成)と、宗派社会部人権問題担当より貸し出しの約三十枚が展示された。

パネルが伝える生々しい戦争の惨禍に、「もう二度と日本を戦場にしない」との、言葉を越えた非戦・平和への想いを新たに示す展示となった。

ウクライナ緊急支援募金

上映会当日は、ウクライナ支援募金も行われた。

戦争により、平和な生活奪われたウクライナの人々を支援するための「ウクライナ緊急支援募金(主催:浄土真宗本願寺派)」には、二万二千六百円が、また、ウクライナから避難された方の就労や通学、日常生活の支援のための「神戸ウクライナ支援募金(主催:神戸市)」には、二万四千四百二十三円が寄せられた。

オンラインで仏華研修

「コロナ禍でも有意義な研修を」と、寺族婦人会連盟がZoomを使い「仏華研修」はじめての仏華」を、八月二十九日に開催した。

講師に、本願寺の仏花を立てておられる水本高史さん(有限会社花新代表取締役)をお迎えし、事前収録の動画と水本氏の指導を交え、楽しくやり取りしながら研修が行われた。

参加者からは「ご指導いただいた仏華を、そのまま本堂へお供えてきてうれしい」と好評の声も。



別院特設スタジオからライブ指導

寺婦連盟では、違ったテーマでの仏華研修も企画。興味のある方はぜひご参加を!

研修で使った動画はこちら





新区画

3段型納骨壇

上段 納骨所使用懇志 100万円以上
 年次維持冥加金 7万5千円
(使用期間15年分)

中・下段 納骨所使用懇志 80万円以上
 年次維持冥加金 7万5千円
(使用期間15年分)

3段合わせてお申込みの場合は
 使用懇志250万円となります

[ご納骨スペース]

上段=幅38×高さ28×奥行35cm

中段=幅38×高さ28×奥行35cm

下段=幅38×高さ27×奥行35cm

※写真はイメージです。

納骨壇新区画のご案内

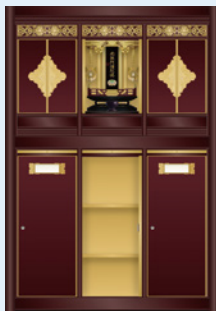
このたび、神戸別院北館四階に新しい形の納骨壇「三段型納骨壇」ができました。

これまで「普通区画納骨壇」と「小型区画納骨壇(五段型)」の二種類をご案内しており、普通区画は一区画ごとにお仏壇があり、小型区画は十三区画で一つのお仏壇にお参りいただく作りとなっておりました。

新区画となる三段型納骨壇は、普通区画納骨壇の納骨スペースが三つに分かれており、それぞれのお申込者でご利用いただくことができ、お仏壇のあるうえ納骨スペースは小型区画に近いものとなります。これまでお墓は代々引き

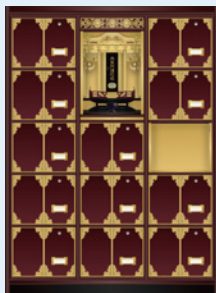
普通区画納骨壇

納骨所使用懇志 250万円以上
 年次維持冥加金 15万円
(使用期間15年分)
 幅40×高さ190×奥行40cm
 [ご納骨スペース]
 上段=幅38×高さ28×奥行35cm
 中段=幅38×高さ28×奥行35cm
 下段=幅38×高さ27×奥行35cm
 ※写真はイメージです。



小型区画納骨壇

納骨所使用懇志 80万円以上
 年次維持冥加金 7万5千円
(使用期間15年分)
 幅43.5×高さ30.7×奥行39.5cm
 各家用のお仏壇はございません。共有のお仏壇へのお参りとなります。
 ※写真はイメージです。



年次維持冥加金納付により使用期間を延長することができます。
 骨壺は使用者の希望する大きさ・種類で納めることができます。

後々を受け継いでくれる方がいなくなっても、神戸別院の納骨壇をご使用になられた方は、神戸別院の永代納骨「安穩壇」へご移骨しお護りいたします。ご使用の納骨所を返還されてご移骨される場合、納骨懇志は不要です。※永代経懇志をお願い致します。

継がれる「家墓」が中心となっておりましたが、近年は「生き方の多様化」により、屋内納骨壇を利用される方の中には「家族」や「夫婦」での埋葬を希望される方もおられます。神戸別院の納骨壇は、幅広いご納骨の希望に沿える様、様々区画をご案内しております。お問い合わせは別院まで。
 【078-341-5949】

創業昭和25年。人と地域をつなぐコミュニティ交通。
 観光や各種送迎にはジャンボタクシーをご利用ください。



キクヤ交通株式会社

〒653-0021 神戸市長田区梅ヶ香町1丁目17-14

電話. 078-651-7800

